

子育て支援における通信メディアの役割と可能性に関する研究（継続）

研究代表者 小川克彦 慶應義塾大学 環境情報学部 教授

1 はじめに

前年度の研究では、解決の糸口が見えない少子化問題を考える上での通信メディアの役割に対する基礎的研究を行った。本年度の研究は、その基礎研究を頼りに、より実践的な解決の方法を探るものである。

そもそも、少子化問題の要因は、前年度の報告書（小川, 2011）で指摘した通り、高度に複合的なものである。少子化対策が、初めて国策として取られるようになった90年代当初は、保育施設・サービスの充実を中心に対策は実施されてきた。しかし、これらの対策は効果をあげることが出来ず、現在に至っては、家族問題・地域問題・就労問題など多方面にわたっての要因が想定され、「出来ることはすべてやる」という姿勢で様々な対策が立案され、実行されている。結果、少子化の一つの指標である合計特殊出生率は、最低であった2005年の1.26から、2010年には1.39まで回復し、一定の成果を見せていると言える。しかし、日本における合計特殊出生率の人口置換水準（人口が将来にわたって現状のまま維持できる水準）は2.07であり、「持続可能」な状態とは、言い難い現状だ。

本研究の中で、度々指摘したように、少子化問題の背景には旧態依然とした社会制度の問題がある。現状の社会制度においては、子育ては家庭・家庭に残された「最後の社会的機能」（山田, 2005）である。一方で、その家庭に残された社会的資源は、縮小する一方だ。他国と比べても圧倒的に長い父親の就業時間、これまで子育てを中心になって担ってきた女性の就業率の増加、核家族化の進展による、祖父母からの支援の減少（牧野他, 2010）、こうした家族の縮小傾向は、もはや変えることのできない大きな潮流であると考えられる。子育ては、こうした「力をなくした」家庭・家族に「取り残された」活動とも言える。構造的に大きな矛盾を孕んだ社会的実践なのである。必然的に、その実践は多くの家庭・家族において、そこから漏れださざるを得ないのだ。

その意味で、子育てにおいて、家庭・家族の周辺にあるものの存在は大きい。本研究では、その「家庭・家族の周辺にあるもの」として「社会的ネットワーク」の存在に着目した。父親・母親が個人的に持つ人間関係・社会的ネットワークが、子育てにおける身体的・情緒的・情動的サポートを得る上での資源となっていると考えたのである。そして、通信メディアは、そのネットワークとの「インターフェース」となる存在である。特に子育て期は、物理的移動が大きく制限されたライフステージであり、いつでも・どこでも他者との接触を可能にする通信・モバイルメディアの可能性は大きいと考えられる。本研究では、この子育てにおける社会的ネットワークの活用と、通信メディアの可能性を焦点に2年間にわたって、調査・分析・研究を行ってきた。1年目は、主に現状の子育てにおける社会的ネットワークの形質と、通信メディアの利用に関する分析を、2年目は、それにもとづいた実践的取り組みを行ってきた。本報告書では、その2年間の研究内容全般を簡単にではあるが、紹介する。

2 子育てにおける社会的ネットワークの形質と通信メディアの役割（昨年度の研究まとめ）

2-1 場所に依存する社会的ネットワークと通信メディア

（1）母親の社会的ネットワーク

昨年度行った分析によれば、幼稚園を利用する母親と保育所を利用する母親では、社会的ネットワークの形質と通信メディアの利用形態・効果が有意に異なる事がわかっている。

幼稚園の利用者は、一般的に保育所の利用者よりも、子育てに関連する社会的ネットワークの規模が大きい。このネットワークはほぼ親族と友人で構成されており、女性が多いのも特徴である。通信メディア、特にケータイメールが多いのも特徴的で、通信メディアの利用が多くなると、ネットワークの規模も大きくなる事から、通信メディアが支援ネットワークの構築に積極的に活用されていることがわかる。また、友人を中心とする支援ネットワークが有効に機能しているのも幼稚園利用者の特徴であり、ネットワークの規模が拡大すると、子育てにおける不安度が軽減し、満足度を向上させることもわかっている。すなわち、通信メデ

メディアの利用が、ネットワークの拡大を通して、子育ての負担軽減に寄与しているのである。

一方、保育所の利用者は、幼稚園の利用者よりも、一般的に子育てに関係する社会的ネットワークの規模が小さい傾向がある。ネットワークの構成も友人の比率が幼稚園利用者比べて低く、代わりに保育士や医師などの専門家比率が高い、また、男性も幼稚園利用者比べて多く、多様性の高い構成となっている。通信メディア利用のネットワークへの効果（ケータイメールの利用が多いほど友人の数が多く、SNSの利用が多いほど、ネットワーク全体の規模が大きい）自体は、幼稚園利用者とは変わらないが、通信メディアの利用自体が、負担になることが多く、必ずしも通信メディアの利用は、子育ての負担軽減には繋がっていない。

以上のように、母親たちが持つ社会的ネットワークや通信メディアの意味は、母親が身を置く場所によって傾向が異なる事が、昨年度の研究からは明らかとなった。

表 1. 幼稚園・保育所を利用する母親のネットワークとメディア利用

	幼稚園を利用する母親	保育所を利用する母親
社会的ネットワークの規模	・保育所利用者より大きい	・幼稚園利用者より小さい
社会的ネットワークの質	・友人中心/女性が多い	・多様性が高い (親族/専門家の立場が重要に)
メディアの利用量	・多い(特に携帯電話のメール)	・幼稚園利用者より少ない
ネットワークの効果	・不安度を軽減・満足度を向上	・維持コストが負担に。
メディア利用のネットワークへの影響	・ケータイメールを多く使う人は、友人の数が多く。 ・ソーシャルメディア(SNS)はネットワーク全体の規模を拡大させる	

(小川, 2011; 天笠, 2010 より作成)

(2) 父親の社会的ネットワーク

これまでは、母親の子育てに関するネットワークとメディアの利用に関してまとめてきたが、次は、父親の子育てに関するネットワークとメディアの利用が、幼稚園の利用者と保育所の利用者で異なるのかについてまとめてみたい。

まず、一般論として、共働きが前提の保育所に比べ、片働きの多い幼稚園利用者は、就労時間が長くなり、その分、子育てに参加する時間が短くなる傾向がみられる。ある意味、子育てから隔離された環境になりやすいと考えられる。その分、女性を中心とする子育ての社会的ネットワークとの距離が有り、社会的ネットワークに占める女性の割合も、保育所利用者比べて低くなる傾向がある。しかし、一方で、幼稚園の利用者のうち社会的ネットワークの中の女性比率が高い人は、子育てに積極的に参加している傾向が見られ、片働きの家の子育てにとっては、多様なネットワークを父親も築くことが重要であると考えられる。この多様なネットワークを築く上で、効果的だと考えられるのが、通信メディアである。ケータイメールやソーシャルメディアの高利用者群は、異性の友人数が多いことがわかっている。

松田(2008)の先行研究では、母親が子育てを行う上で、最大のサポート源は父親であると指摘している。その上で、特に同質化しがちな幼稚園利用者の父親のネットワークを多様化していくことは、今後重要な課題になると考えられる。その意味において、通信メディアは大きな可能性を持っている。

表 2. 幼稚園・保育所を利用する父親のネットワークとメディア利用

	幼稚園を利用する父親	保育所を利用する父親
子育てへの参加	・就労時間が多く少ない	・就労時間が短く多い
社会的ネットワークの質	・女性が少ない	・女性が多い
メディアの利用量	・幼稚園利用者とは保育所利用者で有意な差はみられない	
メディア利用のネットワークへの影響	・ケータイメール/ソーシャルメディアの利用が、女性との接点を拡大させる	
ネットワークの効果	・女性が多い程子育てに積極参加	・特になし

(小川, 2011 より作成)

2-2 子育てにおける場の重要性

(1) 子育てにおけるメディアとしての場所

上述したように、子育てにおける社会的ネットワークは、父親・母親が活動する「場所」に大きな制約を受けている。こうした「場所と社会的ネットワークとの関係性が強い」という事実には、いくつかの要因があると考えられる。

一番の要因であると考えられるのが、子育てという実践が高度に身体的な実践であるという点だ。子どもは、生身の人間であり必ず身体的なケアが必要になる存在である。(例えば、関井ら, 1991; 久保, 2001) この身体的なケアを行う際には、物理的な「場所」が必須となる。これまで、少なくとも高度経済成長期から近年にかけては、こうした身体的なケアの場は、家庭という物理的に閉鎖された空間が中心であった。さらに家庭を出たとしても、「公園」という限られた選択肢しかあり得なかった。しかし、近年、子育てが家庭からこぼれ出た結果として、子どもの日常的なケアの場が公園以外の公共空間まで広がりつつあるのである。

こうした子どもの日常的ケアのための場所は、公共空間であるが故に複数の人々が利用することになり、そのための規範やルールが、社会的に構成される事になる。この場を参与する人々は、子どもとの活動・実践を通してそのルールを構成し、受け入れ、そしてそれがその場の文化として定着していく。故に、利用している場によって子育てにおける規範やネットワークに差異が生まれるのだと考えられる。

その意味においてこうした子育てのための公共空間、場所は、個人が持つ異なる価値観を編集し、その場に特有の子育て規範や文化を創り出す、一つのメディアであると考えられる。本研究では、この考え方に基づいて、以後の議論を進めたい。

(2) 開放的なネットワークと閉鎖的なネットワーク

こうしたメディアとしての場所と其中で構築されるネットワークの形質や通信メディアの役割を理解するため、昨年度は、地域子育て支援センターと呼ばれる施設においてフィールドワークを行った。「地域子育て支援センター」とは、悩みを持つ母親とのカウンセリングや子育て団体の支援も行える子育てアドバイザーが常駐する屋内の公園の様な施設であり、主に未就園児を持つ母親が子どもを連れて訪問し、施設内で子どもを自由に遊ばせることが出来る。厚生労働省が「地域における子育て支援の推進・未就園児を持つ親の孤立」を目的として、全国的に設置を推進している、子育てのための新たな公共施設である。本研究では、神奈川県藤沢市の北部にある湘南台子育て支援センターをフィールドとして、週1回、2時間程度のフィールドワークを行い、そこを利用する母親や子どもたちの行動を観察した。更に随時聞き取り調査を行い、その結果の記述・分析をおこなった。

その結果、子育て支援センターを基盤としたネットワークには、2つの異なるタイプの社会的ネットワークが混在している事が明らかとなった。ここではこの2つのタイプのネットワークをそれぞれ「開放的なネットワーク」と「閉鎖的なネットワーク」と呼ぶことにする。

表3. 子育て支援センターにてみられた社会的ネットワークとその特徴

	開放的なネットワーク	閉鎖的なネットワーク
基盤とする社会関係資本	・橋渡し型	・結束型
ネットワークの形質	・大きく多様	・小さく同質的
主に得られる子育て支援	・情動的支援	・情緒的支援(一部、身体的支援)
典型的なメディア利用	・非即レス文化 ・プレゼンスメール	・頻繁なメールやりとり ・SNSにおけるコミュニティ
利用する子育て支援	・公的/専門的支援	・友人/親族からの支援
基盤とする価値観	・気楽さ/ギブ&テイク	・共感/つながり/仲間意識

(小川, 2011 を元に作成)

「閉鎖的なネットワーク」の特徴は、構成メンバーが定まっている小さなグループであるということであり、その間で強制力のある頻繁なメディア上でのやりとりを伴うことである。年齢や経済力、ファッションなど、ある程度の共通性を基盤に作られる事が多く、共感やそれを元に生まれるつながり意識を元にした同質的な集団だ。境界とメンバーシップが明確であるという点で、SNS上に築かれる子育てコミュニティもこのような閉鎖的なネットワークとなりやすい。少なくとも、オンラインで築かれたネットワークが、支援センターなどのリアルな場所に進出するとき、それは排他性の高い同質的な集団となってしまうがちな。1990年代から指摘されていた「公園デビュー」という言葉に代表される公園を基盤とした同質的な母親たちの集団も、閉鎖的なネットワークの一つの携帯だと考えられる。こうしたネットワークの排他性は問題にされがちであるが、一方で、情緒的支援や一部の身体的支援に絶えうるくらいの強固なつながりを生み出しやすいという特徴を持っている。社会的ネットワーク論(Granovetter, 1973)や社会関係資本論(Lin, 2001)という結束型の紐帯・社会関係資本を持ったネットワーク・コミュニティである。

他方、「開放的なネットワーク」の最大の特徴は、構成メンバーが曖昧な大きく多様なネットワークである

ということである。こうしたネットワークを持つ母親たちは、他者と関係を築く上での「気楽さ」を強調する。メールを送ることはいとわないが、その返事に関しては、過度に「どうしても（返事をしなくても）いい」という事を強調する。また、返事を期待せず自分の居場所を親しい友人たちには送信し、強制力のない中で気楽に「会える」機会を探っている。彼女たちが、こうした弱いつながりを意図的に保ち続けようとする背景には、子育てをする上での「情報」の重要性がある。子育て世代が少ない多くの地域において、子育てに有益な地域情報は、十分な量がインターネット上に発信されていない。故に、地域に点在する子育て支援サービスやイベントを活用し、楽しみながら、楽に子育てをするためには、可能な限り大きなネットワークを形成し、そこから情報を集めることが必要不可欠となる。「開放的なネットワーク」は、各公的・商業サービスへのアクセシビリティを確保するための資源なのである。

地域子育て支援センターでは、以上の2つの異なるタイプのネットワークが、混在し共存していた。実は、これは非常に珍しい現象であり、将来の子育て支援とメディアのあり方を考える上では、大きなヒントになると考えられる。次章では、本年度の研究として、昨年度の研究から見えた子育て支援ネットワークに対する問題意識と、その解決の方向性について考える。

3. ハイブリッドなメディアとしての場所

3-1. 二者択一なネットワーク

上述した「閉鎖的なネットワーク」と「開放的なネットワーク」は、地域子育て支援拠点内に限らず、子育てをしている人々が一般的に持っている社会的ネットワークの類型である。更に言えば、子育て中だけでなく、このような大きく多様なネットワークと小さく同質的なネットワークは、一般的な社会的ネットワークの類型であると言える。

本研究において、あえて、この2つのタイプのネットワークの存在を主張するのは、現代社会の子育てにとって、「両方の」ネットワークの存在が、本来は必要不可欠だと考えられるからだ。2章で述べたように、閉鎖的なネットワークと開放的なネットワークでは、提供できる支援の種類が異なる。閉鎖的なネットワークからは、リスクの低い日常的な身体的支援や愚痴聞き、共感などの情緒的サポートを多く受けることが出来る。一方で、情動的支援も多く受けることが出来るが、閉鎖的な人間関係の中であり、受けられる情報の絶対量は限られてしまう。これに対して開放的なネットワークからは、簡単な共感など、一部の情緒的支援と、豊富な情報源を活用した情動的支援を得ることが出来るが、気楽な関係を前提としているので、リスク・コストの高い身体的支援を得るのは難しい。

天笠（2010）が取得したデータ（下表4）によれば、子育ての不安度を軽減させ、満足度を向上させる効果が高いのは、日常的ケアのサポート・子育ての情報が欲しい時のサポートが充実したときだという。これら2つを同時に満足させるためには、タイプの異なる2つのネットワークを同時並行的に保持するしかない。

表4. 子育て不安度・満足度をサポート得点によって説明する重回帰分析の結果

サポート項目	主な担い手	子育て不安度		子育て満足度			
		推定値	p 値	推定値	p 値		
身体	親族 専門家	病気時のサポート	-0.126	0.460	0.076	0.140	
		大きな用事時のサポート	0.004	0.985	-0.100	0.105	
		急な残業・用事時のサポート	-0.387	0.037	0.055	0.329	
		日常的ケアのサポート	-0.371	0.051	0.178	0.002	**
情緒	閉鎖的 ネットワーク	心配事の相談のサポート	0.211	0.448	0.161	0.055	+
		不安や愚痴を聞くサポート	0.409	0.220	-0.109	0.280	
		大変さを理解して欲しい時のサポート	-0.862	0.002	0.102	0.215	**
情報	開放的 ネットワーク	子育て情報が欲しいときのサポート	-0.493	0.006	0.179	0.001	**
自由度調整 R2 乗			0.179		0.196		

** 1%有意, *5%有意, + 10%有意

しかし一方で、この2つのネットワークは、共存しにくいネットワークである。特に閉鎖的ネットワーク

は、メンバーシップを持った人間以外を排斥するような排他性を持っているため、一度そのメンバーになってしまうと開放的ネットワークの紐帯を断絶させるような方向に力学が働きがちだ。ここではこうしたネットワークの共存を阻害しようとする構造的な力学を「ネットワークの二者択一性」と呼ぶことにしたい。

しかし、このような「ネットワークの二者択一性」が見られる一方で、日常生活の中では、多くの人がこの2つの異なるネットワークを共存させている。これは、巧みなアクセスコントロールの結果であると考えられる。すなわち、排他的なサブネットワークに所属する人には、他のネットワークを見せないような工夫を各自が行っていると考えられるのである。一番わかりやすいのが、ネットワークごとに「場所」を使い分けることだろう。職場・家庭・趣味のサークルそれぞれの場所があることで、感情的な結合を維持したまま複数のネットワークの資源を活用できるようになる。また近年のSNSにはこのような考え方が導入されており、詳細なアクセスコントロールが可能になりつつある

一方で、子育てにおいては、一般的にこうしたアクセスコントロールが難しい状況にある。先にも述べたように子育ては、物理的ケアとそれを行うための場所を伴う実践である。そして、家庭以外の子育てのための場所は、広い意味ではほぼ「地域」に限られる。この常に「誰かに見られているかもしれない公共空間」である地域が、子育ての主要な場である限り、場所を切り分ける事でのアクセスコントロールが難しいのである。ゆえに、子育てにおいては、その場所とそこに集まる人の多数派が、行動規範を作り、それが固定化されてしまいがちだ。ゆえに、場に固有のネットワークが発生し、それを選択するか否かの「二者択一」を迫られてしまう。こうした強制力を持つネットワークとしては、「公園デビュー」（本山，1996）で描かれたママコミュニティなどが良い例だろう。こうした強制力ばかりが強調されてしまうと、子育ての負担ばかりに目がいく結果となってしまう。

3-2. 横軸のハイブリッドコミュニティ

遊橋ら（2007）は、ケータイの登場によって、個人が「情報と社会と関係」をケータイできる時代になったと述べた。ケータイのモビリティが、アクセスコントロールされたネットワークの維持管理と利用を容易にし、結果、個人が異種混交（ハイブリッド）なネットワーク・コミュニティを、持ち歩く時代になっていると主張したのである。

こうした個人単位のハイブリッドなネットワークを、縦軸のハイブリッド呼ぶのであれば、子育てに求められているのは、地域を基盤とする、地域の内部でのハイブリッドなネットワーク、すなわち横軸のハイブリッドである。Wellman(1978)は、都市におけるコミュニティは衰退したのかという有名な「コミュニティ問題」の議論の中で、コミュニティは、都市においては地域を離れ、時間空間的に分散して異なる形で存在し続けているというコミュニティ解放説を唱えた。ここで主張したいのは、こうしたコミュニティの解放のゴールとして、通信メディアの力を借りて実現された、分散的なハイブリッドコミュニティを、再び地域という物理的空間の中に、取り込む必要性なのである。

その意味において、先に述べた地域子育て支援センターは、この2つの異なるネットワークの共存が、ある程度実現された空間であった。観察をしていても、センター内では常に両方のタイプのコミュニケーションが見られ、場合によっては、一人の人間が同じ場所で、異なる2つのネットワークを使い分けていた。

本研究では、今年度、こうしたネットワークの共存が可能になる理由について、子育て支援センターにおけるフィールドワークの観察やインタビュー結果から分析を試みた。その結果、以下の3つの理由が仮説として浮かび上がった。

(1) 一時的にネットワークを解体する機能がある

子育て支援拠点には子育てアドバイザーと呼ばれる見守り・相談を行う専属スタッフがいるが、彼らが行う仕事の一つに「近すぎる人たちを引き離す」というものがある。こうした引き離しは、車座になって集団で話している利用者の輪の中に入り込み、個人間で話をはじめるといった自然な形で行うこともあれば、元々集団でやってきた利用者に対しては、「皆さんが利用する場なので、他の人が利用しにくくなるような集団のご利用はお控えください」といったように、直接はっきりと伝えることもある。

こうしたスタッフの努力により、湘南台子育て支援センターの中では、排他的な閉鎖的ネットワークが場を支配してしまうようなことは、少なくともフィールドワークの最中は一度も見られなかった。スタッフが「分断者」となり、適宜その場で構築されるつながりを編集することで、逆に新たなつながりが生まれる余地を確保していたのである。湘南台子育て支援センターは、母親たち、ママ友たちのつどいの場であると同時に、閉鎖的なネットワークからの「逃避の場所」ともなっていたのである。

(2) どの集団にも（一時的にしか）所属しないマージナルなアクターがいる

支援センターの利用者の常連の中には、活動的で子どもを連れてかなり広範囲に遊びに出る母親たちがいる。彼らに特徴的なのは、支援センターを利用する他の母親たちに気軽に話しかけ、その場で様々な情報を教えたり、教えることによって新たな情報を引き出ししたりしている点である。そこで獲得した新たな情報を頼りに、彼女たちは、自分たちの家族のみで子どもたちとお出かけをし、子育てを楽しんでいる。彼女たちは非常に顔が広く知人が多いが、友人関係では気楽さを重視し、ドライな側面を持っている。インタビューで、「頼りにしているママ友は何人いますか」と質問した際に、「0人です。子育てに誰の助けもありません。」と答えた母親がいたことを見ても、彼女たちの独立性とマージナルな立ち位置がわかるだろう。しかし、マージナルな彼女たちは、決して孤独という訳ではない。マージナルであることを利用して、様々なネットワークにアクセスし、情報を引出し、その情報を他のグループに伝達しているのである。いわば、彼女たちは、支援センターという場所を介して、情報の受粉を行うミツバチであると言えるだろう。

彼女たちは、あまりに自由に動き回るために、支援センターで他者と会う機会も限られているように見える。しかし、ケータイなどのメディアも使いこなしており、プライバシーを含まない、子どもを持っている人ならだれでも行きそうな場所（例えば支援センターや図書館、地域の基幹公園）にいるとき、「今〇〇にいるよ」と知り合いたちに一斉でメールを送信する。このようにして、既存の知り合いたちとの弱いつながりも維持し続けるのである。

(3) 場所（とその場にいるスタッフ）に、地域に関する知識が集積されている

支援センターでは、積極的に子育てアドバイザーが母親たちと話をし、地域に関する情報を母親たちから収集をしていた。さらに、その収集した地域情報を、まだ地域情報をあまり多く持っていない母親たちや、他のネットワーク・グループを持っている母親たちに積極的に伝達していた。こうすることで、閉鎖的なネットワークを中心に活動している母親たちも、豊富な情報にアクセスできるようになり、ひたすら関係性が再生産されるようなやり取りではなく、そのグループと異なる行動がとれるようになる。また、その情報を求めて、センターに来るようになる母親たちも多く、ネットワークの新陳代謝が増す結果となる。本来は、母親たちの2つのネットワークが共存すべきところを、子育てアドバイザーが疑似的に開放的ネットワークの役割を果たし、そして、その共存を促すのである。その開放的ネットワークの役割をアドバイザーが果たす上で重要な要素となるのが、地域情報や知識である。これらの蓄積と積極的な発信が、支援センターにおけるネットワークの共存を促し、実現させる一つの要素となっていた。

4. 検証実験

今年度における本研究では、上述した子育てにおける「横軸のハイブリッドネットワーク」の構築を目指して、フィールドワーク先である湘南台子育て支援センターに協力を依頼し実験を行った。先の章では、湘南台子育て支援センターのような、地域子育て支援拠点ではある程度の横軸のハイブリッドが実現していると述べたが、子育てにとって本当に有益なネットワークのハイブリッド化を図るためには、やはりまだ解決せねばならない問題も多い。ここでは、まずその課題について述べ、更にその課題を解決するための必要な施策を探るために行った実証実験について、報告をする。

4-1. 横軸のハイブリッドネットワークを実現する上での課題

現状の地域子育て支援センターにおいて、場所をメディアとして横軸のハイブリッドネットワークを築く上での課題は、地域情報の収集と共有にあると考えている。上章では、この情報の収集と共有にスタッフが大きな役割を果たしている点について触れたが、人の口コミによる伝達では、一定の限界があることもまた事実である。スタッフの人数は限られており、一人一人に割ける時間も限界がある。故に母親たちが持っている豊かな情報を最大限収集することも出来ず、そのすべてを、開放型ネットワークを持たない母親たちに伝えるのも難しい。さらに、開放型のネットワークの基盤となる情報流通を円滑にするためには、子どもの日常的ケアに必要な情報をより容易に取得可能な情報源を作り、さらには母親たちから母親たちへの情報伝達を円滑にする仕組みを作らなければならない。

この母親間の情報伝達で問題となるのが、子どもの成長である。子ども、特に未就園児の成長は早く、月単位で大きく状況が変わる。こうした状況に対応するために、母親たちは、子どもの月齢をベースとしたネットワークを築く傾向にある。すると、折角その月齢にあった遊び場やイベントの情報を手に入れても、す

ぐにその情報は自分たちにとって不必要な情報となってしまう、当然、それを伝えれば有益なはずの、より月齢が下の世代にも伝えずに終わってしまう。すなわち、母親同志の縦の関係が築けず、先輩ママ達の有益な経験や知識が生かされず、情報の収集と流通が非効率になる可能性が高いのである。

ゆえに、本研究では、こうした月齢によるサブネットワーク間の壁や、人が情報の流通の中核を担うことによるスケーラビリティ限界を排除した、子育てのための場所のメディア化・横軸のハイブリッドネットワーク化を目指すための、実証実験を実施することにした。

4-2. 実験 1：ポータルサイトの構築

まず、情報配信の基盤となるプラットフォームを構築するため、フィールドのある神奈川県藤沢市と地元の NPO 法人と協働で、藤沢市の子育てポータルサイト「子育てネットふじさわ」のリニューアル作業を行った。今回のリニューアルでは、デザインを整理し、より明るくて見やすいデザインを目指すとともに、藤沢市内のデジタル化可能な子育て情報の網羅を目指して、情報量を増やして充実させた。特に注目すべきなのが、イベント情報の掲載である。市の広報や子育てサークルなどから情報を集め、子育てイベント情報のカレンダー化と一覧化を実施した。すると、下図のように、急激に PV 数、訪問者数が増える結果となった。(3月にイベントカレンダーを追加) やはり、こうした地域の「イベント・遊び場」などの「日常的ケアを手助けする情報」は、子育てにおいてキラーコンテンツであると考えられる。こうした情報が、子育て支援センターを中心に円滑に流通すれば、場所のメディア化や横軸のハイブリッドネットワーク化もより効率よく実現しそうである。

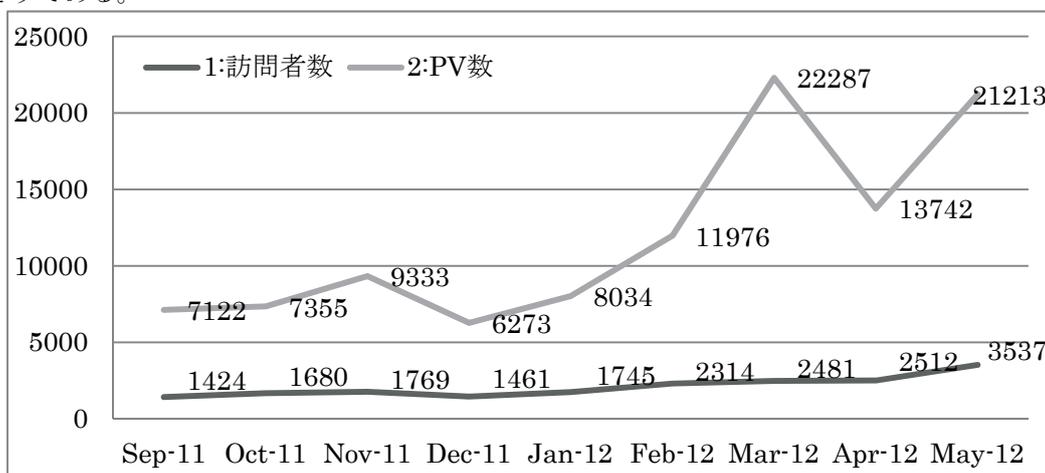


図 1. 子育てネットふじさわの、イベント情報掲載後のユニークユーザ数・PV 数推移

4-3. 実験 2：居場所・地域情報の発信実験

次に、こうした地域情報をどのようにすれば場所に蓄積し、それを容易に共有可能になるのか実験にて検証を試みた。当初は、上述した藤沢市の子育て情報プラットフォーム内に、システムとして構築する予定であったが、湘南台支援センターの利用者たちのサイトの利用状況や閲覧環境を考え、まずはアナログな方法を用いて、情報の発信と閲覧の際の障壁の理解を試みた。

具体的には、支援センター内に、センターの周辺の地図を張り、付箋を用意し、センターの利用者に自分が知っている子育て情報をその場に張っていくことを求めた。(下図 2 参照) 呼びかけは、張り紙で行うほか、子育てアドバイザーにも、声かけを依頼した。

その結果、はじめに集まった情報は非常にわずかであったが、調査者が利用者に声をかけると、次々と地域内の情報が集まってくるようになった。なぜ、自身で情報を書き出せなかったのかについて聞くと、単純に面倒だったという声の他に、「こんな情報は当たり前でみんな知っていると思ったから」「聞いて貰うまで、単純に思い出せなかった」などの声が多く聞かれた。「自分がいつも言っている近所の公園」などを知られることにも抵抗がある人もいたようである。また、書き込みを行う者が少なくとも、閲覧に関しては、手の空いた利用者の多くが、じっと見つめる様子が多く見られ、興味やニーズが高いことが読み取れた。

多くの母親にとって、自らが持つ情報は自明のものであり、何かしらキューがないと、情報発信には至らない事が今回の実験からは明らかになった。更にプライバシーの意識も、より詳細な情報発信には障壁となっている。しかし、一度発信され、共有可能な環境におかれると、その情報は貴重であり、特にまだ活発に活動が出来ない乳児を持つ母親にとっては大きな意味を持つ。このことを考えると、オンライン上に地域情

報の収集発信システムを構築することは、閲覧環境としては、重要であるが、発信の環境としては、工夫の余地が大きいことがわかる。なにかしら、利用者に直接呼びかけ、対話の中で情報を収集・発信出来る様な仕組みを作ることが、今後のシステムの開発では求められる。



図2. 実験の様子

5. 結びに代えて

本研究においては、子育てという高負荷なライフステージにおける、通信メディアの利用と社会的ネットワークの類型について、先行研究や調査分析から整理を行った。その結果、「閉鎖的ネットワーク」と「開放的ネットワーク」の類型とその中での典型的なメディア利用の形を見いだした。しかし、子育てサポートの構造から考えると、より子育てにサポータティブな環境を作り出すためには、この「閉鎖的ネットワーク」と「開放的ネットワーク」の併存するハイブリッドな環境が、地域内で必要となる。こうした環境を作り出すための施策とメディアデザインを考えるために、基盤となるメディアプラットフォームを構築し、情報流通の実験を実施した。その結果、ハイブリッドなネットワークの基盤となるはずの情報の発信が、各自単独では難しい事、その部分をエンパワーメントするための仕組みやメディアが必要であることが明らかになった。

今後は、今回の研究期間内では実現出来なかった、ハイブリッドなネットワークを地域内で実現する子育て情報メディアの構築を目指して引き続き研究を継続していく予定である。可能な限り、完成を急ぎ、オープンなプラットフォームとして、今日における子育て問題の解決に貢献したいと考えている。

以上

【参考文献】

- Granovetter, M. S., (1973) "The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology*, Vol.78, 1360-1380. (=2006, 大岡栄美 訳「弱い紐帯の強さ」野沢慎司 監訳『リーディングス・ネットワーク論——家族・コミュニティ・社会関係資本』勁草書房)
- Lin, N. (2001) *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press.
- Wellman, B. (1979) "The community Question: The intimate Networks of East Yorkers," *American Journal of Sociology*, vol.84, 1201-1231
- 天笠 邦一 (2010) 「子育て期のサポートネットワーク形成における通信メディアの役割」*社会情報学研究* Vol.14(1) 1-16.
- 小川 克彦 (2011) 「子育て支援における通信メディアの役割と可能性に関する研究」電気通信普及財団 研究調査報告書 vol.26 p22-30.
- 久保 桂子 (2001) 「働く母親の個人ネットワークからの子育て支援」*日本家政学会誌*, Vol.52(2) 135-145.
- 関井 智子, 斧出 節子, 松田 智子, 山根 真理 (1991)「働く女性の性別役割分業観と育児援助ネットワーク」*家族社会学研究*, Vol.3, 72-84.
- 本山 ちさと (2006) 『公園デビュー—母たちのオキテ』, 学陽書房
- 牧野 カツコ, 渡辺 秀樹, 船橋 恵子, 中野 洋恵 (2010) 『国際比較にみる世界の家族と子育て』ミネルヴァ書房.
- 松田 茂樹 (2008) 『何が育児を支えているか——中庸なネットワークの強さ』勁草書房.
- 山田 昌弘 (2005) 『迷走する家族』有斐閣.
- 遊橋 裕泰, 河井 孝仁 (2007) 「ハイブリッド・コミュニティ—情報と社会と関係をケータイする時代に」, 日本経済評論社.

〈発表資料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
父親の子育て参加と通信メディアによる趣味ネットワークの構築	社会情報学会 全国大会	2011年9月
ハイブリッドネットワークの結節点としての場所メディア—子育て期の両親のメディア利用に関する一考察	情報通信学会 全国大会	2012年6月